

佐藤研一名誉教授を偲ぶ会
十三回忌

日時：平成26年5月17日（土）

場所：京成ホテルミラマーレ

千葉大学歯口科入翠会



佐藤研一 名誉教授

式次第

一．開会挨拶

一．会長挨拶

一．教室教授挨拶

一．献杯

一．開宴

一．佐藤研一先生を偲んで

工藤逸郎先生

露崎孝二先生

石山信之先生

今井裕先生

一．閉会

入翠会会長挨拶

会長 甲 原 玄 秋

今年は佐藤研一先生の13回忌であり、このような会を催させて頂く事となりました。そして、佐藤先生を偲んで、北海道、四国など全国各地から多くの先生にお集まり頂きました。

佐藤先生から学んだことやお世話頂いたことをいくつかお披露目して、ご挨拶とさせて頂きたいと思います。私は昭和50年に東京歯科大学を卒業し、歯口科に入局しました。その当時、佐藤先生はまだ講師で、その後、堀越達郎教授の後を次いで、昭和54年に教授になられました。私は、堀越先生、佐藤先生、薬理学講座の村山先生、麻酔科の米沢先生など多くの先生方のご指導により、なんとか学位を頂くことができました。その後、



私が医局長をやっていた昭和62年か63年頃に千葉県こども病院準備委員会が千葉大で発足し、佐藤先生のご指名により携わることとなりました。そして、佐藤教授からそのままこども病院で仕事しないかと言われましたが、私は広島に帰って地域医療に尽くそうかと考えていたため、自分に務まるか不安があったことを覚えております。そのとき、佐藤教授が私の大学在職中に博士号を取得した研究や投稿した論文を一冊にまとめて、立派な業績集を作り、その表紙に「贈る甲原講師殿、昭和63年盛夏、千葉大学医学部歯科口腔外科 佐藤研一」とサインして2冊贈って下さいました。そして、年に1回位は学会発表できるように頑張らなさいと励まして頂きました。その様な佐藤先生からの後押しがあったからこそ、これまでやってこられたと思います。

また大学時代の話に戻りますが、佐藤先生が教授になられた翌年の昭和55年から東日本学園大学、福島県立医大、日大など様々な大学の先生方が集まって発表するという教室例会が開催されるようになりました。その当時、佐藤教授は毎日12時過ぎまで医局員の発表の指導をととてもエネルギーにされていたのを覚えています。さらに癌の手術においては、頸部郭清術に始まって、腫瘍切除、再建術まで行い、朝9時から夜12時位まで、頑張っておられました。その様な長時間の手術の時に処置の合間をみておにぎりを食べていた姿を思い出します。懐かしい思い出ではありますが、佐藤先生の粘り強さや、患者さんに対する真摯な態度を間近で拝見し、私もこども病院で頑張ろうと感じながらやってきた次第です。また、私が論文を書く際には佐藤先生に共著として見て頂いておりました。日本語の部分は、すぐに「これでいいよ」と言って頂けるのですが、英語の文章になると、「うーん、ここはこうした方がいいよ」と嬉しそうに直して頂きました。とても丁寧に指導いただいたおかげで、毎年論文を書く事ができました。話は変わりますが、私は出始めた頃のLCⅡとい

う機種からMacのコンピュータを使用しております。当時、佐藤先生が私に少し遅れてMacを買い、Macについては私の方が少しだけ先輩のため、時々、教えてくれないかとお誘いを頂いて佐藤先生のお宅に伺うことがありました。Macの事だけでなく、こども病院で経験した症例のお話をしたりして、大学に居た頃以上にいろいろと親身にお付き合い頂き、ご指導を受けました。昔の先生はご存知だと思いますが、当時のMacのコンピュータはブラウン管のディスプレイでした。ソニーのトリニトロン管や三菱のダイヤモンドトロン管が色の再現性が良いブラウン管ディスプレイでしたが、サルベージ品が安く販売されており、それを買って佐藤家へお届けしたという懐かしい思い出もございます。

公私にわたってご指導を受けて楽しく過ごさせて頂き、佐藤先生のおかげで今があると思っております。今回、丹沢教授のご提案により13回忌を催すことができました。今日は皆さん全国から沢山集まって頂き有難うございます。引き続き色々な先生の御挨拶がありますので、これを会長の挨拶として終わりにしたいと思います。ありがとうございました。



教室教授挨拶

教授 丹 沢 秀 樹

佐藤先生を偲ぶ会にお集まり頂きまして本当にありがとうございます。私は、個人的にも非常に思い出があり、教室の教授として大きく感謝していることがあります。それは、私共の教室が非常に家庭的であり、教室は家庭の庭であると教えを頂いたことです。みなさんも思い出して頂きたいと思いますが、お正月の佐藤先生の家での新年会に始まり、3月にはお花見がありました。寒かったですが、千葉大学は桜の名所ですから、季節感のあふれる行事でした。春には、医局の同門会の後に医局旅行があり、1年生とお酒を飲んで、飾らぬ姿をお互いに確認して、ほっとしていました。そして、暑気払いもあり、秋には学会旅行もありました。これも昔は今と違って、会議も少なく学会の合間に、皆で食事や旅行に行き、非常に楽しかった思い出があります。暮れになると、仕事納めの日は半日で終わらせて、皆でそばを食べた後、ボーリングに行ったり、あるいは眼鏡が壊れるような激しいバスケットボールの試合をやったりとよく勉強もしたけれど、よく遊んで楽しい交流があったと思います。そういった懐かしい思い出がありますので、今でも「教室は家庭の庭である」そういうつもりでやらせて頂いております。全国の様々な出身校、出身地の方々が集まっている教室では、大事なことだと思います。



私の大学院生の時は、ウイルス学教室に行っておりました。1980年代の中盤に分子生物学という学問が出来ましたが、私がそれを学んだのは1989年ぐらいでした。最初の論文は1989年頃に投稿しておりますが、最新の医学研究領域を、勉強させて頂いた事が、今日の私共の研究の基礎となっております。そのおかげで、現在では生化学教室や他の教室に行く事なく教室内で、最先端の研究が行うことができるようになりました。少しプレッシャーを掛けているのかもしれませんが、たくさんの大学院生が結果を出し、勉強をしながら楽しんでくれていると思っています。

それから、私は当時の第一外科の奥井教授と千葉大学の樋口手術部長にご心配して頂き、第一外科の関連病院である国立習志野病院などで、麻酔学、手術学の全てを教えて頂きました。そこで手術は教育的に行う、つまり人に教えるための手術を行う、と教わってきました。そのため、私共の教室で行われている手術は教育的に行うように努め、一人が名人のような顔をして行う手術ではなく、「みんなで一緒にやる」という形ですとやってきました。教授就任当時からその様にやってきたことで、非常に興味をもって手術を勉強してくれた医局員も多かったと思います。そのため、現

在ではどこよりも出血量が少なく、手術時間が短く、生存率のいい手術を出来ていると思います。これは頭頸部だとか自分の教室の手術法に固執せずに、全身の様々な分野の手術を見させて頂き、そのなかで再度、頭頸部の手術を考え直してやった姿なので、他大学の先生方が見ると、非常に驚かれることが結構あります。お褒めいただいているかどうかは別ですが、技術的な質問を受けることもあります。「誰にでもできる手術」、「簡単にできる手術」として手術法を開発し、全てをチームで実践していく、そういった姿が今実現できています。

一般的に外科系の教授は、後に自分が批判されることになるため、医局員を外に勉強に行かせることを嫌いがちです。しかし、佐藤先生はそういうことなく、広い心で私を手術修行に出してくれました。それが今日の医局の力になり、全員の総力を挙げた研究や治療に役に立っていると思います。佐藤先生のように、広い心をもった教授として最後まで勤めて終わることが出来ればと願っている次第です。

佐藤先生に御礼を申し上げるとともに、皆さんにも医局でよく遊んだことを思い出して頂きたいと思います。最近は時代背景もあり、勤務時間は勤務時間として、仕事だけに専念しなければならないため、医局員の皆で遊ぶのはなかなか難しいです。しかし、勉強や仕事だけでなく、出来るだけ医局員で遊び、色々な話をできるような医局でありたいと思っていますので、是非ご支援を頂ければと思っています。教室の教授として、佐藤先生にもう一度、御礼を申し上げて挨拶とさせて頂きたいと思います。本当に佐藤先生有難うございました。



佐藤名誉教授が亡くなられて、ちょうど今年13回忌を迎えます。

本日は、先生を偲びまして、献杯の前に思い出等についてお話ししたいと思います。

平成14年9月24日、佐藤研一先生が亡くなられましたと丹沢教授からのご連絡を頂き、かねてから療養されておられました国立千葉病院に伺いました。病院へ向かう途中、佐藤先生もやはり病には勝てなかったかと考えました。国立千葉病院では鈴木一郎先生に大変お世話になっておりました。

佐藤先生は、千葉大学医学部を卒業後、東京医科歯科大学歯学部を卒業され、昭和39年春に千葉大学歯口科教室に入局されました。それ以前から、父上が教授であられたという関係で、歯口科に時折顔を出して頂いておりました。私は昭和38年の暮れに退局したので、医局で佐藤先生と一緒に仕事をしたことはありませんでしたが、堀越先生の時代から同門会の行事等を通じ交流させて頂いておりました。また、堀越先生の後任として昭和54年8月から千葉大学歯口科の教授に昇任され、お父様の佐藤伊吉名誉教授も、ご息子が念願の教授に就任され大変なお喜びで「研一当选感謝」のお手紙を頂いたことを記憶しております。先生は親子2代に渡って千葉大学歯口科の基盤を作られました。お父様と共に歯口科教室の伝統と歴史を大切にされ、教室の発展に尽力されました。佐藤先生は学問の面では、臨床を主体に考えられ、研究熱心で多くの門下生を指導され業績を作られました。スポーツもお好きで、学生時代からサッカー、野球そしてゴルフにも熱心で私も何回か一緒にプレーさせて頂いた事が思い出されます。

先生は常に温厚で真摯な態度で人に接し、その人柄は若い時の禅修行とご両親の感化によるものが多くの方が感銘を受けておりました。堀越達郎先生が亡くなられた時は遺族の方のご都合で告別式が済まされてからのご連絡がありました。佐藤先生は大変心を痛められ、平成11年11月27日にお別れの会を行いました。思いやり、気配りの強い苦勞人であったと思います。在りし日の佐藤研一先生を偲んで心からご冥福をお祈りし、献杯いたします。献杯。



佐藤先生の菩提寺にて

私と佐藤研一先生では、研一先生の方が年上でした。私は昭和37年に日大から言われて、千葉大に来ました。これは教授である佐藤伊吉先生が日大の口腔外科に週2回の授業に来られており、その時に私が黒板消しをしていたため、その様なお誘いを頂いたのだと思います。その頃の千葉大口腔外科は医局員が不足していたようです。それから昭和47年までの10年間、千葉大にお世話になり、最後は准教授まで務めさせて頂きました。ちょうど口腔科学会の総会長を堀越先生がされており、私が準備委員長をさせて頂き、それが終わってから退職させて頂きました。この度、丹沢教授が日本口腔科学会の理事長に就任された事は非常に縁がある事だと思います。



私は佐藤先生が発見された、佐藤株というマウスの自然発生株冷凍保存法という研究を口腔科学会に投稿して学位を頂きました。その当時、学位は口腔科学会に論文を提出してもらうものだと思っていました。そのため、口腔科学会には深い関わりを感じます。当時、佐藤先生がどのような研究をされていたのかは自分のことで精一杯であり記憶しておりません。今の千葉大の隆盛を目にすると、うらやましい部分もありますが、より発展するよう祈念致しております。

佐藤先生はよくサッカーをされておられました。それから医局対抗野球がありまして、エースは露崎先生で、それから東日本学園大学、今の北海道医療大学に行かれた金沢先生が、よくやられておりました。

佐藤先生には男のお子さんが二人おられますが、私は上が女の子、下が男の子で、2人共同じ年の生まれのため、家族ぐるみの思い出もございます。佐藤先生のお宅へ行くと、方々に例えば机に「desk」、扉に「door」と英語で書いてあり、息子さんたちに覚えさせようとしていたのかなと今でも思い出します。

それから、佐藤先生が千葉大学の歯科口腔外科例会を創設された時に協力を依頼され、千葉大と日大と北海道医療大学の三校を主として創設しました。この学会は正式な学会のため、ここで発表すればきちんとした業績になるということで始めました。第一回例会で、私達からは「口腔外科領域における軟性樹脂床の応用」という発表をしたことを今でも覚えています。

最後は露崎先生と一緒に佐藤先生のお見舞いに行きました。大変お元気で病室ではなく外で随分と話をし、その時はあんなに早く亡くなるとは思っていませんでした。近く退院できるのではないかという話もあった位なので、非常に残念に思っています。今でも時々先生を思い出して本当に良い先生だったと思います。

またある時の話ですが、金沢先生から私に電話がかかってきたことがありました。佐藤先生が北海道へ来られているのだが何で来られているのか分からないと。なんで来られたのでしょうかねという話をしたのですが、私にも見当がつきませんでした。佐藤先生はそういう、何となく分からない所があると言ってはおかしいですが、あるときはユニークだし、あるときは人間の幅が大きい、そういう方だったと思います。今でも本当に懐かしく思っております。

いずれにしても、先生の13回忌を迎え、非常に月日の経つのは早いなと改めて思います。一番出来の悪い私がこのようにしてご挨拶を差し上げるのは非常に申し訳ない気もしますが、先生のご冥福を祈ってご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。



私は昭和42年に入局して以来、佐藤先生が亡くなるまでお付き合いをさせて頂きました。前の先生方のお話にもありましたが、佐藤先生は本当にもの静かで温厚な不言実行型、言い換えると黙々と物事を実践する先生でした。

先ほど工藤先生がおっしゃった様に、私が入局した頃は、医局員が10人程度にも関わらず、大勢の入院患者がおり大変だったことを記憶しています。当時、病院には中央検査部がなく、入局1年目の先生が赤血球から白血球からすべてカウントしていました。時々、間に合わなくて堀越先生から怒られた事もありました。スメアやギムザ染色などをやった時は、佐藤先生が来て、「できたかい？」と言いながら、一緒に顕微鏡を覗いて下さり、色々と学ばせて頂きました。そのことが本当に良い思い出として残っています。また、自分達で病理の診断がつかないときは、佐藤先生から「ガンさん、ガンさん」と呼んでいた病理の岩崎先生に聞いて来いよと言われ、岩崎先生のところで「どうですか？」と診断を仰いだりしました。しかし、歯科独特の病理のため、診断がつかず、堀越先生の勧めで医科歯科の秋吉先生に直接伺ったこともあります。私はこの様に医局で勉強させて頂きました。



また、入局一年目は、夜9時、10時頃まで仕事が終わらないのが当たり前の生活でしたが、その時間になっても、佐藤先生をはじめ工藤先生など皆さんが大体は医局にいらっしゃり、それから一杯やって、楽しい遊びに行きました。佐藤先生も、将棋、囲碁、麻雀、お酒、ゴルフ、野球など多趣味でなんでもされていました。昭和44、5年頃、佐藤先生から長谷川先生というプロの棋士の将棋の勉強会に行こうということで、市原にあった出光の寮で5～6台の盤を使い一斉に将棋をしたことを覚えています。また、先ほど丹沢教授がおっしゃっていましたが、花見の季節になると、普段物静かな佐藤先生が乗ってきます。グラウンドの野球場の3塁側の所に桜の樹が4本あったのですが、毎年その樹の下で焚き火をして、酒盛りをやりました。その頃は新病院がなかったので、静かで真っ暗闇でいくら騒いでも問題ありませんでした。食べるものが無くなると、野蒜を採って食べました。また、野球では、医局対抗とか関東口腔外科野球大会とか盛んに行われており、両方優勝して堀越先生も大喜びで、佐藤先生も喜んだ事がありました。そしてまた医科歯科の方とは国府台球場で野球をやり、スタンドで千葉商大の応援団の人たちが応援歌の練習をしていました。その時、ギンギンギラギラ夕日は沈むという応援歌を、千葉商大の監督さんが踊りながら応援していました。その時、佐藤先生がそれをジーっと観ており、手を振りながらやっていました。熱心に聞いているなあ、いつ使うのかなと思っていると、その年の暑気払いの席ですぐ出てきました。大変楽しいひ

と時を過ごさせて頂いたと思います。一時、佐藤先生から時間があれば将棋や碁のお誘いを受けることがありましたが、実際には4人揃うと麻雀をしていました。堀越先生が帰った後ですから、そういう楽しいひと時がありました。今、千の風に乗って大空を駆け巡っているわけですが、佐藤先生のご冥福を祈念しまして私の思い出とさせていただきます。

最後になりますが、先ほど今井先生が見えてお聞きしましたが、今日の紹介では特任教授ということで、教室の開設者で特任教授というとおかしいなと思って聞きましたら、名誉教授にもなっているという事で、改めてご報告させていただきます。今井先生は佐藤先生の下で長い間ずっと仕えて仕事をしてきたわけですから佐藤先生もさぞお喜びと思います。以上、ご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。



佐藤先生の13回忌に際して当時の思い出をお話しさせていただきます。当時の訃報を頂いたときの混乱した気持ちをついこの間の事のように思い出すとともに、もう13回忌を迎えることに月日の流れを感じます。また、今回は丹沢教授の口腔科学会理事長就任を佐藤先生にご報告できるということを入翠会の一会員として嬉しく思っております。

私は佐藤先生と年齢が13歳違います。私が昭和46年に入局した時、佐藤先生は39歳でした。その当時、堀越先生が教授、工藤先生が助教授で、金沢先生や織間先生、佐藤先生、露崎先生と立派な先生がたくさんいらっしゃいました。佐藤先生の思い出には必ず工藤先生、金沢先生、露崎先生が登場し、全てのことがリンクして顔や声が思い出されます。当然ですがみんな若かったと感じております。

私が入局した時、ある先輩から佐藤先生は佐藤伊吉名誉教授のご子息であり、将来はこの教授になる先生なる方だと教えて頂きました。千葉に来る前にはその様な予備知識は全く無い状態でしたので、その時はじめて佐藤先生の置かれている境遇を知りました。特に佐藤伊吉先生の弟子である高原先生をはじめ入翠会の大先輩の先生方の期待は大きかったと思います。佐藤先生がその様なプレッシャーを感じていたか定かではありませんが、日常的にストレスの多い生活を送っていた様に感じました。その様なストレスがあったからでしょうか、先ほど露崎先生がおっしゃった様に佐藤先生は花見などの時になると驚くほど人が変わりました。普段では想像がつかない程に陽気で饒舌になり、みんなで肩を組んで大声で歌っていらっしゃいました。佐藤先生が歌っているのを見て、「ギンギンギラギラ」の由来がギンギンギラギラという手振りから来ていることを僕は初めて知りました。さらに童謡の「ぞうさんぞうさん」なんて放心状態で歌っていることもあったので、若い入局したての私はこの先生、本当に大丈夫かなと思ったことが何回かありました。今考えると、その様な時間は佐藤先生にとって大事な時間だったのではないかと思います。

私は当時、千葉寺で一人暮らしをしていたので、佐藤先生には休日にドライブに誘って頂いたり、奥様と一緒に陶芸教室に誘って頂いたりなど非常に細やかな心遣いをして頂きました。その後、私も結婚しましたが、結婚した年齢が、佐藤先生と同じでした。さらに結婚した式場も相手の名前も同じだったのです。そのため、今度は退局する時も同じになるのではないかと佐藤先生がおっしゃっていました。次第に講師から助教授になり、教授になるにつれて「ギンギンギラギラ」を歌い続けたかどうかは分かりませんが、日頃の佐藤先生のお人柄については工藤先生や露崎先生からのお話しの様に色々な方が色々なことをおっしゃいます。誠実でまじめで、人の輪を大事にして争



いごとが嫌い、自然が大好きで、スポーツも好きで、全て当たっていると思います。20代の私が30代の佐藤先生を見て感じた事や思った事、それから30代になって40代の佐藤先生をみて感じた事、思った事、それから私が40代になって佐藤先生が50代で教授になられた頃の、私が感じた事、思った事が微妙にどんどん変化していきました。今思えば、根幹は同じでも色々な変化があったことに気付きます。私は佐藤先生のお亡くなりになった年齢にかなり近くなりました。この年になって、佐藤先生を思い出しながら色々な事を考えると、初めて気付く事や発見する事があり、自分の中で新しい佐藤先生の間像が生まれてきます。先生は老後を十分に楽しむこともなくお亡くなりになりましたが、不遜な言い方ではあります、一日一日一年一年を佐藤先生の分までその生活を深く味わう人生を送りたいと思います。

水原秋桜子という俳人がいますがその人の句に「冬菊のまとふはおのがひかりのみ」という句があります。今日の様なぎらぎらとした陽光に照らされたきれいな花がという歌ですが、私は佐藤先生の間像に通じる様に感じられ、この句が大好きです。

「冬菊のまとふはおのがひかりのみ」 佐藤先生のご冥福をお祈りしまして挨拶といたします。



今日、午前中松本で日本口腔外科学会の中部地方会があり、そこでリフレッシュセミナーの講演をして参りました。通常、リフレッシュセミナーは夕方にやります。ところが今日の佐藤先生の偲ぶ会を知っていたのか、それに合わせるような時間に入れて頂き、終わってすぐに佐藤先生の会に駆けつけました。少し遅れましたが、帰りの車窓で南アルプスを見ながら約40年間の思いを巡らせて参りました。車窓を見ながら走馬灯のように佐藤先生の思い出が蘇ってくるのを電車の中で簡単なパワーポイントで思い出を作りましたので、見て頂きたいと思います。



私は昭和48年に神奈川歯科大学を卒業して、千葉大学の歯科口腔外科、歯口科に入局いたしました。それが恩師佐藤先生との出会いです。とにかく佐藤先生は当時から大器を思わせる、裏返して言うと老けて見えました。どこかのおじさんの様で何か近寄りがたいという第一印象でした。そこから色々な事を佐藤先生から学びました。まず我々は歯科大学から口腔外科という教室に入りますので、どうしても口腔外科にばかり目がいきます。当然のことながら口腔外科の疾患や手術などを一生懸命学びました。ところが、佐藤先生が一生懸命に虫歯の治療をされているのにハッと気付きました。佐藤先生は、ご存じの通り医師です。もちろん歯科医師でもあるのですが、医師の佐藤先生が一生懸命に虫歯の治療をしている姿に僕は非常に感銘を受け、なぜ医師の佐藤先生が虫歯の治療を一生懸命やられるのかという事を考えました。それはやはり何らかの全身的な配慮が必要で大学病院でしか治療できない様な患者さんの歯科治療、いわゆる有病者の歯科治療をその当時から佐藤先生は謁見されていたのだと思います。私は今、有病者歯科医療学会の理事長をしておりますが、その時期に植え付けられたシーズがいまに繋がっていると考えております。

当時、教室は口唇口蓋裂などの研究を行っていました。私は佐藤先生が文献から見つけた歯源性腫瘍を作る実験的な発見を目指す研究テーマを頂きました。私の出来があまり良くなかったせいか、佐藤先生ご自身で文献を訳したものをこのようにくださり、一緒に実験をして頂いた記憶があります。

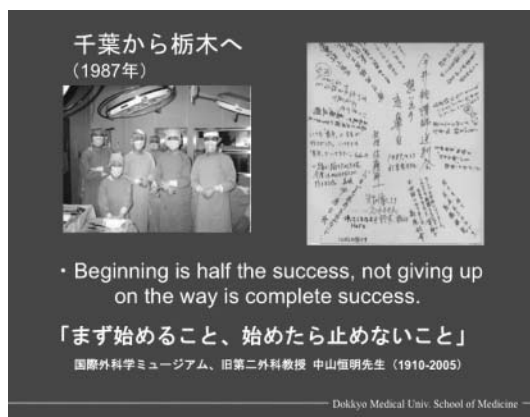
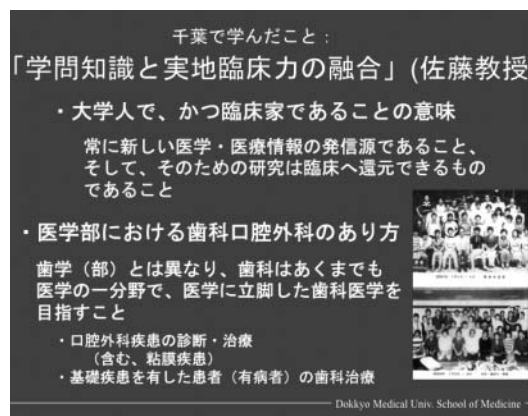
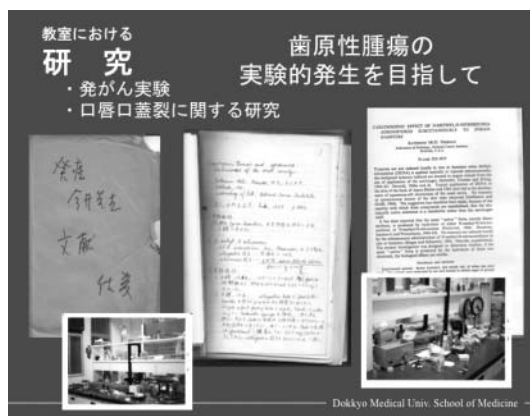
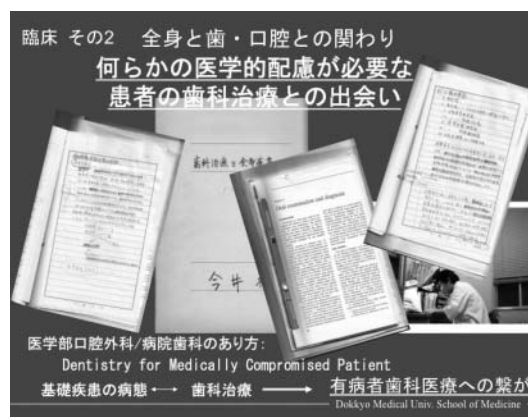
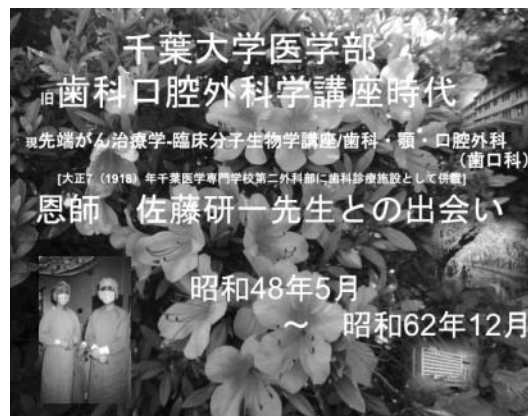
その後、以前の仕事が学位論文にはつながりませんでした。私は開業歯科医の倅で、親父の後をついで少し金儲けをしようと思っておりました。そのため、佐藤先生に学位なんかいらない、ましてや私にはそんな能力はございませんと言いました。そのとき、大変お叱りを受けました。佐藤先生があんなに怒るなんて最初で最後です。「今井君はやる前からなんで自分ができないというんだ、やってみないとわからないよ」と言われました。その後、石山先生のカドミニウムによる口唇口蓋

裂の発生の研究をそのまま私が引き継ぎ、学位を戴きました。佐藤先生から頂いたお言葉が私の学位につながったのではないかと思います。

佐藤先生から学んだ事、これはおそらく丹沢先生も同じ事をどこかで言われているのではないかなと思うのですが、学問知識と実地臨床力の融合。これは佐藤先生に私はきつく言われました。私なりにじっくり理解すると、大学人でありかつ臨床家である意味をよく理解し、つねに新しい医療情報の発信源であり、かつ研究は臨床に還元できるものでなければならない事を教えて頂いたような気がします。また臨床面では、医学部における歯科口腔外科であり医学の一分野である歯科医学を目指しなさいと言われ、少なくとも口腔外科の治療は勿論のこと、先程、申し上げた有病者の歯科治療に一生懸命力を出すようになった訳であります。

そして千葉から栃木へ移りました。1987年に獨協医科大学の当時の赤倉教授から佐藤先生に譲り受けたいというお手紙が参りました。佐藤先生に呼ばれ、猛反対をくらい、行くなと言われました。その経緯は、丹沢教授もよくご存じだとは思いますが、千葉大学は沢山の先生がいらっしゃるから、どうしても人が足りないということであれば2, 3年獨協医科大学でお手伝いがしたいという旨を伝えました。その時の最後の手術の写真です。送別会の時の色紙です。その時、佐藤先生が島崎藤村の別れの歌を歌ってくださった事が私の耳に焼き付いております。そして国際外科ミュージアムの第二外科の中山恒明先生のお言葉に、「まず始めること、始めたらやめないこと」というものがあります。佐藤先生から私が学位を取る時にひどく怒られたことは、まったくこれです。千葉大学の脈々と続いたDNAなのだと思って、現在まで独協大学で頑張っ参りました。この気持ちをもって、思いをもって努力して参りました。

おかげで、その間のいくつかの大きな学会の様々な役職を経て、昨年からは日本歯科医学会の副会長を仰せつかい、現在、歯科医療の機構改革をしようと図っております。この仕事の一翼を担い、一生懸命全うすることが、佐藤先生に対する私の恩返しであり、もっとも出来の悪かった弟子の一人ですから、日本歯科医学会に対する恩返しであると思い、もう暫く頑張ってみようと思います。佐藤先生のご冥福をお祈り致します。どうも有難うございました。



当日お持ち頂いたスライド

これまでにお話しされた先生方は医局時代の私の直属の上司の方々です。そのような中、佐藤先生を偲ぶ会の最後に私が出てくることは非常に恥ずかしいことではありますが、簡単ではありますが、佐藤先生との思い出を話させて頂きたいと思います。私は墮落した学生でしたが、昭和51年に大学を卒業致しました。卒業間近に、将来どのように食べていこうかと考えていた折、佐藤先生と出会ったことが千葉大歯口科への入局のきっかけとなりました。丁度その頃は田中角栄元首相が逮捕される様な世相が非常に荒れていた時期です。当時の医局長であった佐藤先生には、中嶋さんをはじめとする旧病院の医局にいらっ



しゃった方々にご挨拶をしてから伺いました。まだ夕方にも関わらず顔を真っ赤にした先生方がいらっしゃるなど、非常にアットホームな医局の雰囲気に惹かれて入局を決めました。

それから40年近く、千葉を離れることもなく、また開業をすることもなく歯口科医局という庇護の下でこれまで過ごしてきました。

入局以来、堀越先生、佐藤先生、丹沢先生と歴代の教授の指導を受けて参りました。その中でやはり佐藤先生のアットホームな優しい医局の中で支えられて生きてきたと思っています。今日来ている同期の小林君と入局して間もない頃、佐藤先生のお宅に伺った事があります。佐藤先生に招かれ、更に宿泊までさせて頂きました。なかなか佐藤先生のお宅に泊まった医局員もいないと思います。

長い在局中で一番の思い出は佐藤先生が長年の念願でありました例会が開催できたことだと思います。あの頃、若い先生も年配の先生も慣れない原稿やスライドを作って、準備していた事が今でも懐かしく思います。

佐藤先生は直接面と向かって叱責することは全くなく、常に腕を磨いていけとおっしゃい、ただただ甘えて生きてきました。今となっては何の恩返しも出来なかったことが残念に思っております。佐藤先生は退官後も不出来な弟子が大変不安だったようで、毎週手術の指導に来てくださいました。亡くなる前、体調を崩した際にも不出来な弟子がこういった道を進むべきかという手紙を書いてくださいました。

そういう中でこれまで頑張って参りました。これも佐藤先生並びに医局のご理解があったからだと思っています。

最後に、これからの医局の発展と佐藤先生のご冥福をお祈りしたいと思います。どうも有難うございました。



お借りした思い出の写真

額 賀 康 之（昭和47年入局）

先程、よほどの印象深かったのか金沢春幸先生から医局での赤ら顔を紹介されました。今日はあいにく風邪声ですが、健康的な体だと思っております。私は昭和47年に東京歯科大学を卒業し、医局には昭和52年までお世話になりました。その後、当時の金沢助教授とともに東日本学園大学、現在の北海道医療大学の方に創設メンバーとして北海道に赴任し、昭和63年から函館で開業致しました。

皆さんも同じだと思いますが、卒業して間もない4年、5年というのは臨床医にとっては多感な時期です。私が歯口科で過ごした5年間は一生を支配する生活観や医療感を形成した時期だったと思います。

その点で私が非常に幸せだったのは、患者さんとの人間的な関係が異常に濃い千葉という土地で過ごしたことです。病を見るだけでなく人と人との付き合いができました。また、佐藤伊吉先生、研一先生、歴代の教授の先生方も非常に人間味あふれる教室でした。

私は間もなく67歳になります。歯科医として成功とまでは言えませんが、ある程度頑張れるのもあの多感な5年間のお陰かなと思っております。

それでは千葉大学口腔科学教室ならびに入翠会のますますの発展を祈願したいと思います。



思い出の写真

昭和39年 医局員集合写真
～佐藤名誉教授入局～



昭和41年 入翠会



昭和45年 口腔外科教室对抗野球大会



昭和45年 入翠会集合写真



昭和47年 医局員集合写真



昭和49年 医局員集合写真



昭和54年 入翠会集合写真



昭和54年 教授就任祝賀会



昭和54年 教授就任祝賀会



昭和55年 医局員集合写真



昭和55年 入翠会集合写真



昭和57年 医局旅行
～観音寺温泉～



昭和57年 医局旅行
～観音寺温泉～



昭和58年 医局員集合写真



昭和58年 医局旅行
～日光・鬼怒川・那須～



昭和59年 医局旅行
～伊豆・修善寺～



昭和61年 医局旅行
～天竜峡～



昭和63年 教室創設70周年記念祝賀会



昭和63年 医局旅行
～夢科・美ヶ原～



平成元年 医局旅行
～伊豆・稲取～



平成2年 医局旅行
～水上温泉～



平成4年 医局旅行
～佐原・銚子～



平成4年 還暦記念祝賀会



平成4年 還暦記念祝賀会



平成4年 還暦記念祝賀会



平成5年 入翠会集合写真



平成5年 医局旅行
～石和温泉～



平成6年 医局員集合写真



平成6年 入翠会



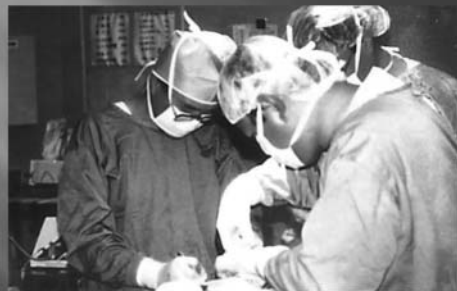
平成6年 医局旅行
～鎌倉～



平成9年 最終講義



平成9年 最終手術



平成9年 退官祝賀会



平成9年 退官祝賀会



平成9年 退官祝賀会



平成9年 退官祝賀会



平成9年 退官祝賀会



平成9年 退官祝賀会



平成9年 退官祝賀会



平成9年 退官祝賀会



平成9年 退官祝賀会



平成9年 退官祝賀会



平成9年 退官祝賀会



平成14年 入翠会集合写真



佐藤研一名誉教授を偲ぶ会

平成26年7月発行

編集発行 千葉大学医学部歯科口腔外科学教室
入翠会
千葉市中央区亥鼻1-8-1

